



椿説弓張月
拾遺 三

~13
3908
21



13
3908
21

鎮西八郎 椿説弓張月拾遺卷之三
為朝外傳

東都 曲亭主人編次

第五十一回

南眉原城に入と妖婦利勇と惑と
佳奇呂麻よ赴と謀師王女を仰と

鎮西八郎為朝ハ舞臺の麓に山神廟あり散錢櫃を打用と
その形勢いと
怪しかりたれハ走り避んとて袂を引とめて縁由取問とむ人ハ女子ハ
とて怖とてこれ言とてまじか行ハ仍も回答とてまじか問れて中と
ふらハ中つとつと此山の北邊なる保似村の村正某甲が女兒とて名
とて海棠と名れ付りしわら秋采女司ふえとみとれて首里の王城へ
とあるべしとてふとてとて都城の騷動浪風とては世となりてとて



春説弓張月拾遺卷之三

及びく立ち之れも決して城中へ入れぬ由断して門内へ入る事
 の軍法をりて罪を乞ふと最重の命を乞ふ衆皆うけりつと
 正門後門の番卒を増加えこれを守ると寇を御すに異なりはやくと
 志すに為朝の散銭櫃を脊負ひつ。城へ入ると多の番卒も遠く
 身少く捍棒を打ちて速きゆゆをれ為朝既ふ二日の約も味
 さかす所容をいとゆるりする。面の皮こそいと厚たれ吾等親方の仰と稟
 たる。今一足も入らんと叶はぬ命を乞ふ銷ても失ふ幸ふその首を全
 とすれぬと罵れぬ為朝もあくと大に怒り小さうしれ燕雀の共
 射の汝木がある所木あつたれ木のつらつら分ありの坊をよといはすき
 て逆茂木のてく左右よりうち合はれ捍棒を足りて丁と拂ひ退け
 進こ入るとし多の狼藉あり。このりりて合する棒を閃け群立

て打く。蕨の根を鋼物ともあつた夏雨の雨より多を繁く。頭の上へ
 打かくれ捍棒長鎌鯨尾の槍次絶え。やと引は。あつひの踏折の極生
 捨人のまき郷をゆくこと。百歩のまりぞりのまの二の城戸をさる氣登之
 ホこの形勢攻めて舌を巻れ入れ立てかかるとて門扉を破と潰したり。
 當下為朝のさつくと歩こよりて散銭櫃を負ひくるま。二の城戸へ
 手をかけて一声高く推しぬ。関木ゆりくと中より折れて城戸は左
 右へ散と開く。その脊力鴻門へ沛公を救ひとる。樊噲のやまじうれを
 ほとり近き兵士あそひく。扉のありまはれ或は路をうち砕れ或は
 手を負ひ腰を折られ半死半生なるりの數十人幸しと罵るれも群
 が。狼の頭が低く。猛虎も向ふ小異なる。舌を吐きけり。群
 阿容くくと通しつ。さる行ふ大に利勇の事の越をゆて大まおあつた。



春宮片長月台賞

美女子
和勇
為朝
勸賞

春宮片長月台賞

春説方張月合續卷之三

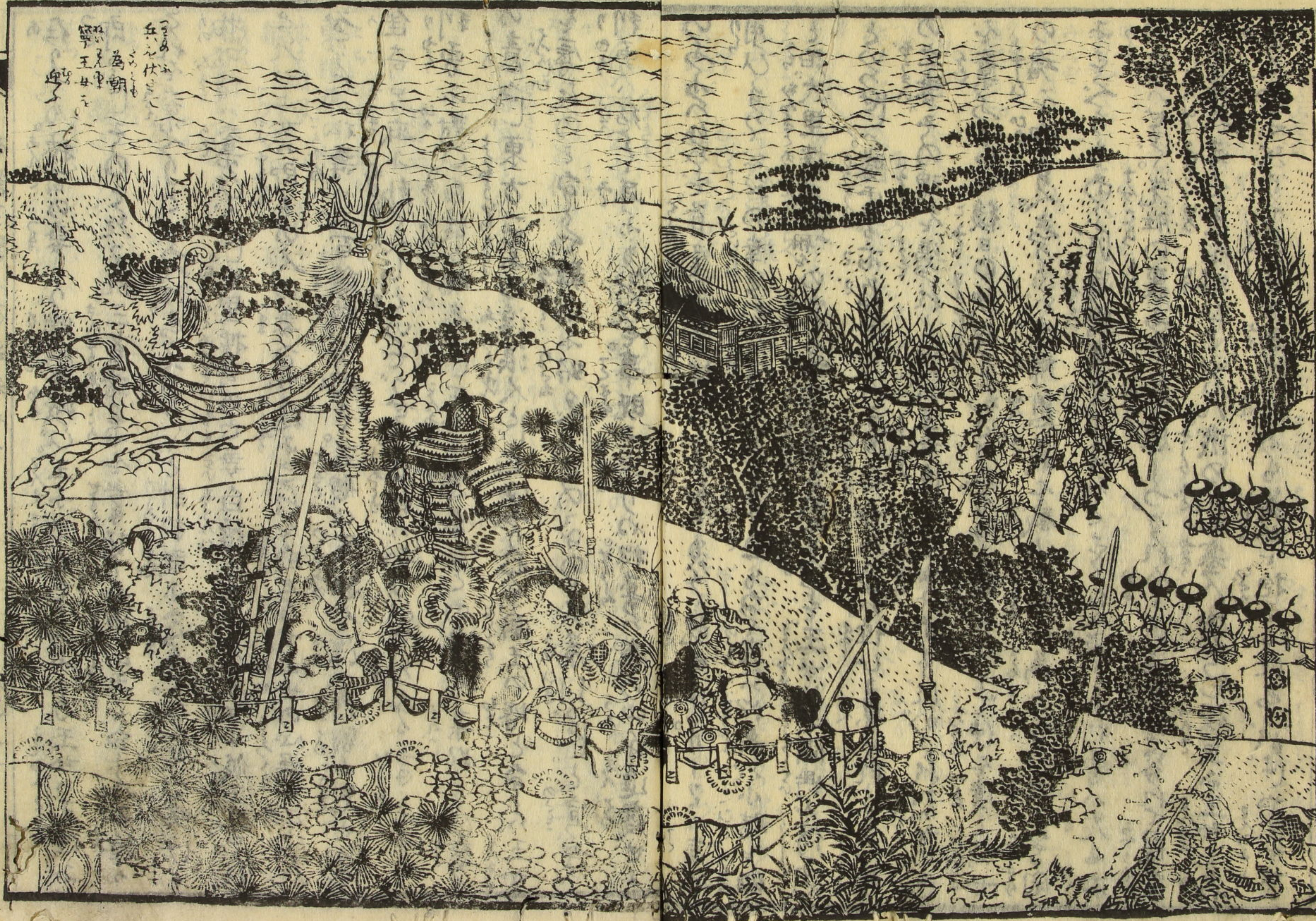
容あつた。かゝる怪しみあつた。さても何の故ありてこの女子
 を信ひ多しとて縁故やまほしくいと詰問が為朝世荒れとらち咲て
 この件のみおけききて種々の未歴あり。某ききの辨嶽の大鳥次
 射て鷲巢山の麓追ひゆれ終ふこれを刺留折らば見せとおや
 くと二人の少年。此くの衣をきく。敵を追れて走り来つ。逃こも
 脱がじとややひん彼本逐お引へ。追敵の兵士と血戦して矢庭
 りこれを撃ちとらり。某樹蔭よりその為体を入れお彼少年を相
 織して速お首里へ赴れ緯のはしを嚙雲に報知んといふ。この間とこも
 少年おの國賊嚙雲がゆれりのありと措いたまひ某一喝して樹間より
 走り出急地件の少年おを撃ちとらてその首をらちととに軀を立地
 消滅して二の首級は目前懸の頭と変じたり。怪しむ恨りなげし
 軀を就の頭を掻切おとて是彼ひとみ右手に提辨嶽のり
 きて支ゆるお保似村と申人の樵夫山見お嚙雲が賊兵を乱妨せられ
 おの痛癢負されお。踏傍お少し。乃躬こつおとか。ほどて
 その消息ををれとしくとも。ちや時後れれば賊兵を撃ちとらつお
 はし。只懐中なる茶をよへてお。手負を勅しゆき行と林原
 なる。山神廟のほとりおして。この女子に遭ね。よりて。その故を問は彼
 と海棠と呼れて保似村と申村正の女児なり。嚙お親同胞を賊兵
 おお撃ちれ。いひひか。只ひとり。辛じて脱去り。この廟内お躲
 たり。且この海棠は王宮へおるべり。来女なれども嚙雲が賊逆の
 騒擾およつて。その頃衣袴なんど。賜りまが。えもあふ。り。南風系へ
 ゆるく。扶して。か。寛若を訴し。ひ。り。乃朝木をよ

春説方張月合續卷之三

七

あざむかれ。その哀傷をえ捨がうて。これまふおろしと頻りに日を
 教へ。城中へ入られを欲する所。今一トとび。大臣お見届して。獺の体
 を生かそうさんと。あめのこと。野心あつた。おれに許し入け
 と。實事。虚言うらませ。審小。速記。瀧比。櫃を引はして。三の
 頭をさし出し。松壽が。指。向。多。利。勇。ハ。松。壽。が。回。報。を。行。は。さ。さ。く
 倚子を離して。為。須。小。對。ひ。れ。眼。ハ。人。の。こ。に。勝。れ。て。大。き。中。の。れ
 と。才。浅。く。智。足。ら。ざ。れ。バ。真。の。豪。傑。と。思。は。れ。尊。小。答。う。ふ。の。邊
 が。好。子。と。入。れ。少。年。ハ。毛。國。典。が。子。と。も。に。流。龜。と。呼。れ。て。は。れ。不。仇。と。し
 窟。ふ。の。く。既。小。前。夜。箇。様。の。の。の。の。の。の。あ。う。れ。ど。も。フ。が。精。忠。と。君。真
 物の憐れみ。ひて。そう。う。い。も。その。救。ま。り。彼。流。を。生。拘。り。松。壽。が。す。め
 ふ。う。り。て。如。此。と。い。は。う。う。せ。ふ。その。計。策。合。期。せ。と。獺。雲。が。伏。兵

全廣亦お切されて。フ。が。腹。心。の。兵。士。趙。豹。李。虎。を。失。ひ。今。又。大。人
 彼。流。龜。と。亦。獺。雲。が。幻。術。少。て。假。お。その。の。め。の。と。え。せ。と。れ。の。と。實。を
 彼。亦。赤。瀬。の。碑。の。け。と。り。め。く。生。拘。れ。と。れ。首。を。刎。ら。れ。る。に。疑。ひ
 な。し。こ。お。と。め。て。い。造。の。武。勇。よ。う。と。獺。雲。が。詭。計。を。あ。つ。つ。が。飲。び
 これ。一。加。旗。美。女。海。棠。を。使。ひ。その。冤。苦。を。告。げ。り。ハ。後。の。信。あり
 その。功。賞。せ。と。い。あ。る。べ。う。に。抑。ふ。牙。名。家。と。て。世。々。高。官。を。辱。し。
 衣。食。満。足。り。て。お。之。と。も。と。ぎ。り。し。が。い。や。ご。か。れ。笑。人。を。え。と。真。舜
 と。娥。皇。女。英。を。辞。せ。と。曹。孟。德。の。英。雄。の。れ。も。二。嬌。を。銅。雀。小。推。乃。ざ。ら
 又。恨。と。せ。り。い。れ。今。こ。の。美。女。以。容。れ。と。も。勇。ま。乃。朝。め。り。智。に。松。壽
 め。れ。ハ。獺。雲。が。幻。術。も。怕。う。に。足。ら。ば。寔。小。曹。司。ハ。人。中。の。龍。海。棠
 ハ。亦。女。中。の。花。なり。その。龍。も。用。あ。る。じ。お。の。花。も。愛。ま。さ。し。情。惟。ろ。山。南



五元伏
為朝
寧王
迎

村
詩
三
別
戶
村
江
卷
三

賢を招いた士を周旋といふべきや。遮莫。為朝大里の按司となりたる。ふりへ寔小園の孝みく。王女の姉。廿五出する。天孫子の餘徳あり。賀もどし。ひとりごら。あふあふ。飲びたり。あれより先。為朝の直。小衣冠を教止。正殿の階下に踏躑。王子と拜。王子ハ誕生。のむら。いまで。暮月あ。ごもご。ま。木偶人。異なる。阿公。を抱きて。高座あり。即為朝を殿上。大里の按司。よ。亦王女を妻。偏。忠勤を抽。矇雲。滅。仰下され。為朝。恩を謝。退出。諸按司親雲上。ホ駭然として。これを同送。怪有る。僕侍。を差。これを妬む。又多。は。朝。法令。大御導。雑兵九人を。大里の城。熱。城中の士卒。対面。して。廿七。十八ヶ村の村正。呼。集合。税。法令。止。ま。賞。叛。を討。ハ。上。枉。俗。下。僻。頑。民。なく。衆。皆。赤子の母。を。下。風。ま。世。有。か。た。洪。福。なり。と。憑。た。あ。ひ。を。さ。せ。り。あ。く。て。等。三。日。あ。ひ。て。為。朝。の。城。中。の。軍。兵。を。集。合。嚮。小。陶。松。前。が。佳。奇。呂。麻。へ。赴。き。よ。の。僕。れ。ハ。や。ゆ。り。事。人。日。も。ま。の。た。れ。今。夜。子。の。刺。ふ。百。五。十。騎。を。招。く。城。を。出。真。和。志。の。山。蔭。に。屯。し。て。松。壽。が。あ。る。と。ま。ん。べ。ま。さ。し。を。昨。夜。間。者。を。遣。し。て。彼。処。の。地。利。を。撈。間。ま。の。和。志。字。平。の。間。の。大。河。あ。れ。も。上。の。二。股。み。ま。り。て。陸。を。流。く。そ。の。流。れ。海。へ。入。り。東。の。う。こ。長。川。の。ほ。ろ。り。に。高。峯。あり。これ。兵。を。伏。せ。終。小。究。竟。の。要。害。あり。切。ハ。後。と。あ。る。ふ。あ。り。り。勝。り。七。敵。を。こ。へ。退。く。り。の。ハ。罪。決。し。て。免。れ。し。此。音。

椿説弓張月合巻之三

十一

お毛國侍查國さくまらも忠死ちゆうしのゆりなどと同じ。説もあはししとて
 されは面影おもかげこそ憔悴せうすい多。昔むかしおまかりりまると亦また為朝たみあの按司あじにあり
 身みを飲のびぬ衆しゆ天丸てんわがるゆかりとて。うち敷しきれまふと死しの扱あつかひのい
 ざるまも日本にっぽんへ来て更さら小玉こたま女によも似にまらん松喜まつきへの形勢かたせうはよく
 為朝たみあの心こころ此こゝ扱あつかひのいへ仍なほなうらぎりけと。と嗟嘆さたんして信しんやふいひ
 慰なぐさめすなうらぎり行ゆ小長おさちの老弱らうじやくととも鮮魚せんぎよ海藻かいそうはよく
 松喜まつきと款待くわんたいし。みま飲のびを述のす。勇ゆうお音ねさるゆりのま。當下たうげ
 王女おんむすめへ松喜まつき小對こたいひて。それの為朝たみあの改妻かさいに。昔むかしの王女おんむすめもあはし
 こをりて時とき人ひとホ白蓮しらね王女おんむすめと松まつ。或あるハ白蓮しらね姫ひめと呼よべり。抑おさまが
 迹あとをこの時とき小瘞せうしころよ。冊ふきはうらむ少女せうじよ二人ふたりあり。一人ひとりは
 わらひとれと呼よべれ又一人またひとりへみまよといふ。彼か小父おふちもさく。母ははもな
 いと惜あはしめりゆりなれば。南風なんふう亦またおておんとおひあり。このゆり
 あらぶきと伺うかがひの松喜まつき且かつく尋思じんしされふ。あらひとれと丹頂にんていはてれ
 持もたり。みまよの曲まがふと亀かめなり。さては持もる亀かめ又またおまの出いで
 ありけと。精せいして莞尔わんじとらら笑わらむ時ときの少女せうじよは南風なんふう亦またおてゆきゆ
 りん。中なかかおれ。とておひのゆり。大臣おんじん利勇りゆうハ狐疑こぎ多おほし。いま
 そのゆりを告つげて候まをす。彼かりの為ため映えいの端はなとなるのへ。某たれ長なが
 小ころははし。別べつ小山こやま取とりて大里おほさとの城しろへ送り遣つかはせしと回答こたへる。
 王女おんむすめも又また松喜まつきが胸中むねぢゆうと精せいして。ぬらびこれをしひ出いで。さうと持も
 龜かめと鴻長こうぢやうが家いへふめりといふ。松喜まつき小對こたい面めんせうりまれ。さて次の日あした
 退風たいふううとて松喜まつきハ王女おんむすめと松喜まつき小扶せ乗りし。その海うみの軍ぐん船せんはほ
 ち護まもりて碇いかりを遣つかはせ出いせ。時とき人ひとホ小残せうざんを惜あはし慕こひをみる。為朝たみあ

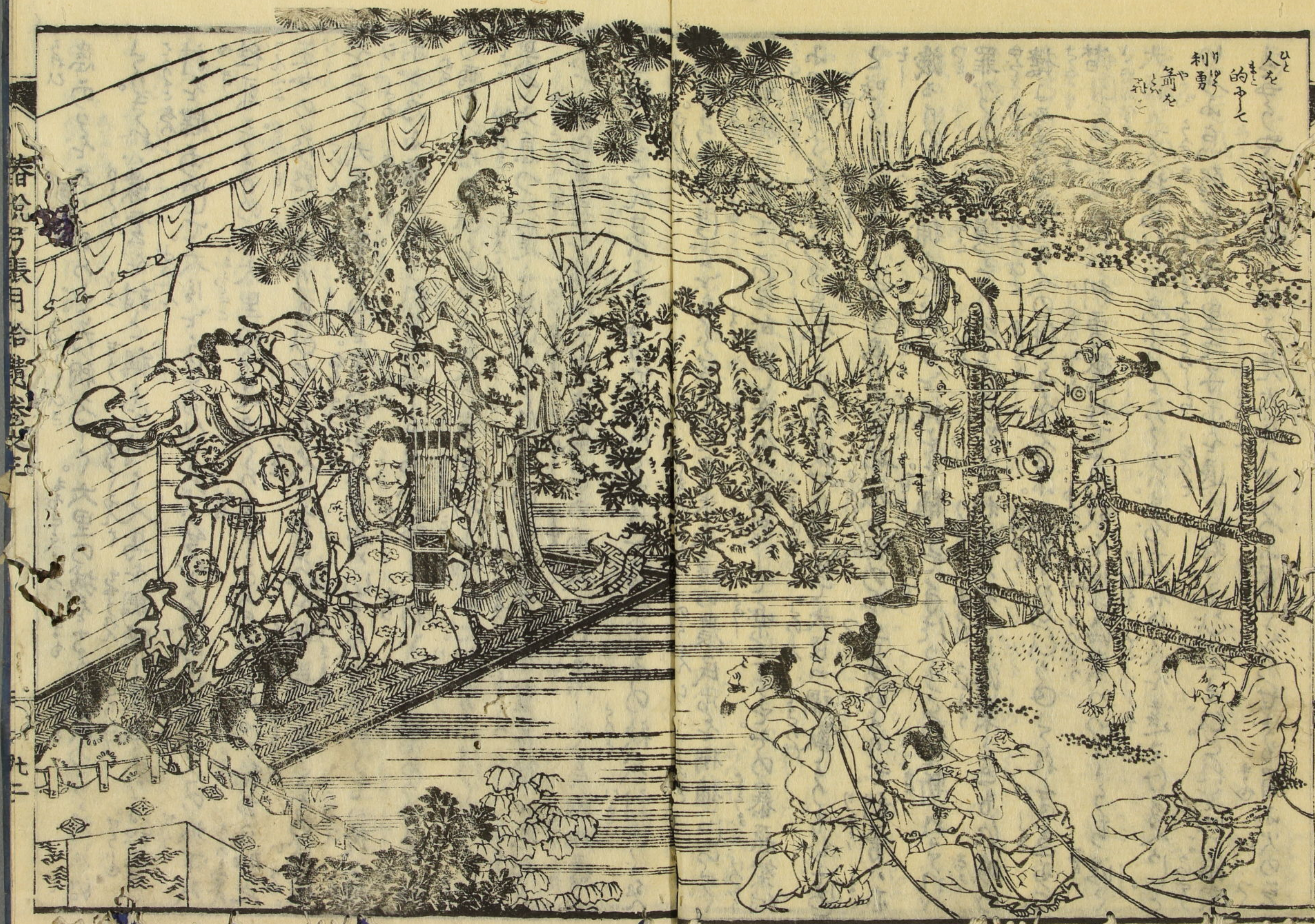
大匠の言傳ふもさりとて回答りおのつひさる琉球言語のあらざれば
 利勇は呆れてまん赤蕉舎ふ誘引し女房五七人か冊して竊ひその
 為体を通つた。よろしう偽るあつたげに王女の裏小松事に移れり
 多敷ふこれハ王女の亡魂が他婦お憑くるなさんされハ面敷こそ王女お
 似され。その人ありあつたげに。去りとも。これ今この女を王女めて
 為御小妻せむバ世の人を義士とし稱ん。あつたけと意の中
 討校て遂ふ松事と疑を懸て。黄道吉日とト食して松事やり
 王女を大里の城へ送つて。婚姻の事より移りて。朝ハ再
 再四推辞すも。その腹をさければ己こそを好む赤緇の繋糸
 西住しあふ経小夫婦の契結く。分てる境を合するぬ。のく
 有一日。佳奇呂麻の嶋長が。誘ひと小松に乗して。潜り大里へ入り
 うが。為朝これを咄び入れて。見と。あつたけ忠孝を賞嘆し。嶋長ハ物
 夥ちして。佳奇呂麻へ。松壽が志のつれ。等々。嘆り。情
 毎をふく。潜りて。城外へ。多敷移る。の。後。さるる。

第五十三回

人々的めて利勇強弓小誘れ
 馬が飛して松壽危窮を告ぐ

今茲も既お暮て。わつ玉のとしまかり。世ハさうやに暖かれども
 人のころろハ長雨なつた。為朝ハ。暖雲が。討滅さん。乃。の。の。の
 人馬を調煉し。民お教る。仁義を以て。賞罰法令に當る。が。は
 こころり。し。ぶ。士卒おのく。その職を。軍民おのく。その業ハ
 の。み。徳。お。化。せ。ど。とい。あ。す。白。種。王。女。亦。頗。婦。徳。あり。自。ら
 蚕。養。して。機。織。を。勤。め。り。か。大。里。十。八。処。の。属。村。と。く。く。治。り。ぬ。

これよりいへば。南風原の城あり。大臣利勇驕けり。人々を治め。美少女海棠とひく。これを鍾愛し。酒宴に自れ長れ日もあはれ。飽をとり。これより続ぐ。燭をりてし。絃歌の声絶る隙に。松壽の傍痛くおぼえ。て。あぐく。これを速れども。要むるも用ひ。せ。隙雲。久しく境を把ま。これより。武威を怕う。万世の切なる生前。一杯の酒あり。あう。この時。楽を。老て命終るの日。悔い。い。て。及ぶ。これ。知主を補佐し。棋政。私なく。民の。為。度。勞。り。かむ。りの。保養。も。人。ゆ。り。を。し。と。回。答。して。諱。憚。る。き。も。あ。り。托。負。の。為。民。を。虐。て。租。税。と。重。く。非。法。の。と。多。う。り。か。む。軍。民。ま。と。く。恨。を。含。ま。て。密。に。大。里。へ。志。が。よ。せ。ん。と。あ。ら。む。れ。ど。流。石。小。利。勇。の。威。勢。に。憚。り。て。氣。を。あ。ら。せ。と。され。と。利。勇。の。民。の。歎。泣。を。か。つ。り。と。して。これ。お。治。め。を。責。し。諫。を。罰。し。只。意。宿。呂。緑。が。徒。同。氣。相。求。る。安。人。亦。を。重。く。用。ひ。て。欽。樂。を。共。得。し。その。傲慢。季。氏。が。八。伯。あ。ゆ。り。て。さ。る。が。國。王。の。柱。び。お。異。な。り。と。う。して。あ。ま。の。年。の。春。秋。が。さ。ま。む。ら。い。為。朝。頼。小。上。啓。り。人。馬。糧。食。の。節。り。と。賜。り。て。隙。雲。を。討。べ。し。と。結。り。も。利。勇。を。可。と。せ。と。夫。兵。の。凶。器。なり。民。の。希。ふ。所。あり。と。り。懸。首。里。と。攻。て。その。軍。利。の。け。毛。と。咬。疵。を。求。る。なり。只。固。く。守。り。て。兵。を。強。く。し。居。る。が。武。威。が。張。れ。お。あ。じ。と。て。聽。さ。れ。為。知。の。只。齒。を。切。り。徒。小。月。日。と。う。た。ま。ひ。かり。松。壽。は。是。彼。の。形。勢。を。て。禍。が。及。ぶ。及。入。る。を。お。そ。れ。て。東。風。平。へ。及。ら。ん。と。の。こ。ひ。へ。竊。り。腹。公。の。即。黨。に。謀。計。を。授。城。中。に。流。言。を。か。て。誰。の。も。が。東。風。平。の。軍。民。亦。按。司。の。久。く。南。風。原。お。



春
冷
月
長
月
拾
遺
卷
之
三

人
を
利
勇
の
中
七
利
勇
の
中
七

林
説
田
強
月
拾
遺
卷
之
三

九
七

身... 功名... 白雉王...

春八年... 神冥... 存亡子故...

忽地南風... 告身... 後者...

頻々大里の城門を敲く... 入れ...

物見の意... 城の中へ迎入れ...

深てもある... 此の声高し...

一室隔て漏判の刃... いうられ故...

椿説弓張...

拾遺卷之三

椿説弓張...

拾遺卷之三

椿説弓張...

拾遺卷之三

椿説弓張...

拾遺卷之三

椿説弓張...

拾遺卷之三

椿説弓張...

拾遺卷之三

椿説弓張...

拾遺卷之三

